

著者インタビュー

『はじめての構造主義』(現代新書)を著した橋爪 大三郎氏



マルクス主義がしりぞいてからの、日本の流行思想の変遷は、ことのほか、目まぐるしい。文化人類学、構造主義、記号論、精神分析学、そしてポスト構造主義……。猫も杓子ものニューアカ・ブームも、あっという間に終わってしまった。

「構造主義も、もう古いといわれて、今はポスト構造主義。いや、ポスト構造主義すら、古いのかも知れない。しかし、本当に構造主義を理解した上で、ポスト構造主義のことがいわれたのでしうか」

橋爪さんはこの本で、構造主義の創始者レヴィ・ストロースの思想を主に取り上げて解説し、たとえばソシュール言語学からの影響、現代数学へのつながりといった、思想史上の位置を明らかにしてゆく。その

手際が、まことに鮮やかだ。

「読んでやさしいということ、なによりも心がけました。本来理屈さえ捉えていけば、どんなテーマでも、いくらでもやさしく書けるはずなんです。『小学生の構造主義』という本だって、ありうろと思えます」

たしかに橋爪さんのこの本は、読んでみてやさしい。『はじめての』人にも、充分、わかる。『怖いもの見たさ』ならぬ、むしろかしの読みたさがあると思えない日本では、『構造主義……』などという思想関係の本は、とりわけむずかしくなるのが普通なのに、不思議なくらいだ。

「日本では、つねに知識に二種類のスタイルというか、二つの言葉があると思うんです。それはたとえば、海外から普遍的な知識が

入って来た場合に、顕著に見られる。まず知識層がそれを受容し、改めて大衆に教えるというのが通例だが、その際、全部ではなく一部だけを教える、つまり必ず差異を保ちながら教えてきたのだ。

「仏教のお経は、今でも漢文です。知識層だけが読める言葉で、民衆の言葉ではありません。知識を、知識人たちが独占しているわけです。この構図は明治になっても、戦後になっても変わりません。知識人どうしの言葉と、民衆向けの言葉と、二つの言葉があるということです。しかし、これはまずい。二つの言葉は、本来、連続的なものであるはずなんです」

やさしく、大衆の言葉で喋るということは、だから大衆にさとし教える、いわゆる「啓蒙」とは、全然違うという。

「(原理的な考察と)同じことの、違う表現でなければなりません」

そういえばレヴィ・ストロース自身、ヨーロッパ文明に比べて劣位とされてきた未開の文明に、「南洋の美人」式な固有の価値を認めた『最初の知識人』であった。



はしづめ だいさぶろう氏 社会学者。1948年、神奈川県生まれ。72年、東京大学文学部卒、77年、東大大学院博士課程修了。性・言語・権力を、社会を構成する三つの力ととらえ、その視点から『日本の社会史』を構想する。『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』などの著書。

沙漠にマングローブを植えようとした男たち

岩波新書 480円

『緑の冒険』

向後 元彦著

(評者)

日本キリスト教海外医療協力会

伊藤 邦幸

珊瑚礁の海岸で泳いだことのある人なら、波打際で波に洗われながらも、むんずと足をふんばって、根を降ろしているマングローブの幼木を見た人は多いことであろう。あるいは海岸線をとる巻く広大なマングローブの林を眺めながら、そこから穫れたカニ料理に舌を打った人も多いことであろう。そんなと

き、「世界中の海水の成分はほぼ同じなのだから、同じような気象条件のところを選べば、沙漠の海岸にもマングローブの林を繁らせることができるかもしれない」と考えた人は、何人もいたに違いない。私もその一人であった。

一九七八年株式会社は登記され、冒険がはじまる。その過程は、手に汗を握る物語の連続で、一息に読みおえずにはおれない。世の中に仕事というものは多くあるけれど、これほどやり甲斐のある仕事もそうさらにはあるまい。